



小学校高学年の 学びに関する調査2019



本調査は、小学4～6年生の学びと保護者の関わりについて尋ねました。ここでは調査結果の中から、子どもが自身の学びを客観的にとらえる**メタ認知**の状況と、それを促す周囲の関わりを中心に、ご報告します。

本報告が、子どもたちのメタ認知を促し、**自律的な学習者**を育む一助となれば幸いです。

●目次●

調査目的・設計、調査概要・・・p2
基本属性・・・p3

①子どもの学び

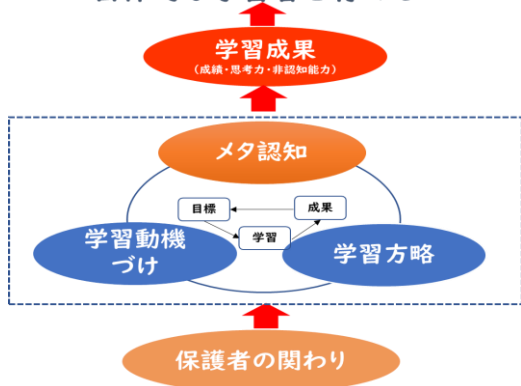
- (1) 生活習慣や学習習慣・・・p4
- (2) 学習時間と読書時間・・・p5
- (3) メタ認知・・・p6
- (4) 勉強方法(学習方略)・・・p7
- (5) 学習の計画と振り返り・・・p8
- (6) 勉強方法とメタ認知・・・p9
- (7) 勉強の工夫と効果・・・p10
- (8) 勉強する理由(学習動機付け)・・・p11
- (9) 学習成果とメタ認知・・・p12

②保護者の関わり

- (1) 生活面や非認知面における関わり・・・p13
- (2) 勉強面における関わり・・・p14
- (3) 保護者のほめ方と効果・・・p15

調査企画・分析メンバー・・・p16

自律的な学習者を育てる



※本調査での学習成果の定義:成績のみならず、思考力や非認知能力も学習成果としている。

※ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」(2014年)をもとに作成。

「メタ認知」の重要性

- ・2020年度から実施される学習指導要領では、「見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」と記され、メタ認知は重要視されてきています。
- ・より高い次元で自分の学習を俯瞰し、客観的に捉える「メタ認知」は「学習動機付け」「学習方略」とともに自己調整学習(学習者が自らの学習に能動的にかかわること)の重要な要素です。

本調査目的

- ・本調査では、小学校高学年の子どものメタ認知の実態、メタ認知と学習方略や動機付け、さらに学力との関連性をみていきます。また保護者の関わりが子どもの自律的な学習への影響を明らかにすることを目的としています。保護者の子育てや学校・教員の教育実践に役に立てていき、最終的に、子どもが自律的な学習者に育っていくことを切に願っています。

本調査設計

- ・「自己調整学習」理論を参考に作成した「主体的な学び」の学習モデル(ベネッセ教育総合研究所2014)をもとに設計。

●調査テーマ 小学校高学年の学びや保護者の関わりに関する意識と実態

●調査方法 インターネット調査

●調査対象

全国の小学4年生、5年生、6年生とその保護者

学年ごとに1,000組のサンプルが集まった時点で調査を終了

●有効サンプル数

小学4年生: 992組

※回答の学年が調査依頼時の学年と、一致しなかった8組を分析から除外。

小学5年生: 1,005組

小学6年生: 1,007組

※小学5、6年生については同時に回答された分を含むため、1,000組を超えている。

●調査時期 7月下旬~8月頭

●調査項目

<子ども調査の主な項目>

ふだんの生活や勉強の様子/ふだん、様々な勉強に取り組む時間・読書時間/メタ認知の実態/勉強方法(学習方略)/学習の計画と振り返り/勉強の工夫と効果/勉強する理由(学習動機付け)/成績・思考力・非認知能力の自己評価など

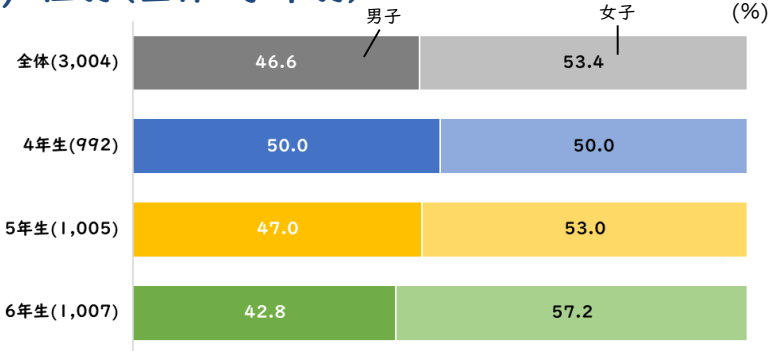
<保護者調査の主な項目>

今、子どもの生活や勉強などへの関わり/小学校低学年の時、子どもへの関わりの振り返り/様々なほめ方/子どもの教育に対する考えなど

■本ダイジェスト版を読む際の注意点

- ① 図表や本文中、とくに学年別の数値や記述を示していない場合、小学4~6年生の全体を表す。
- ② 図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

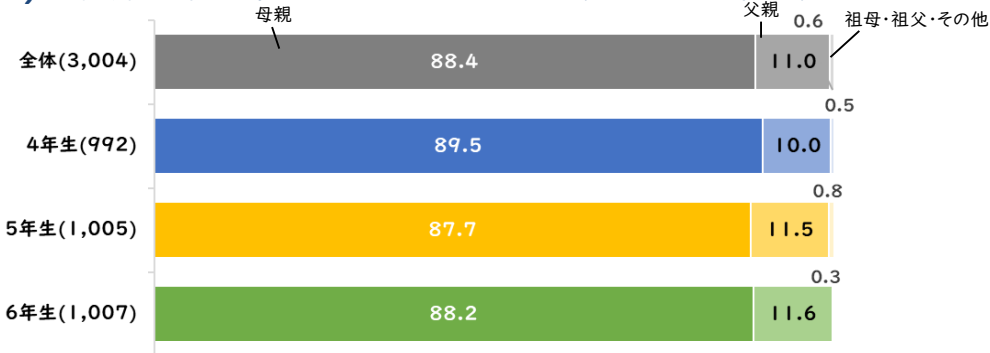
(1) 性別 (全体・学年別)



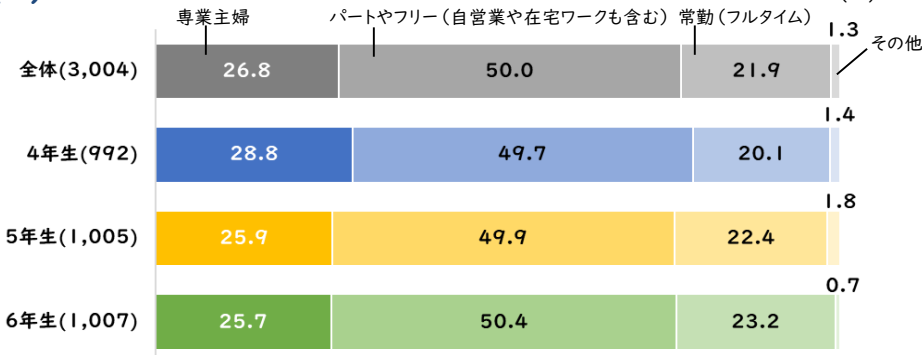
(5) 保護者の平均年齢 (全体)



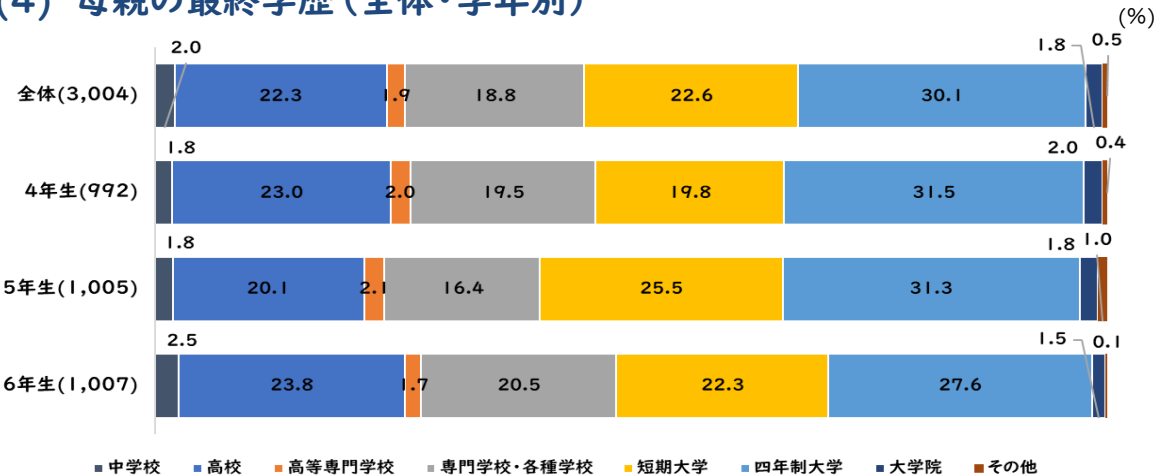
(2) 保護者票回答者と子どもの続柄 (全体・学年別)



(3) 母親の就業状況 (全体・学年別)



(4) 母親の最終学歴 (全体・学年別)



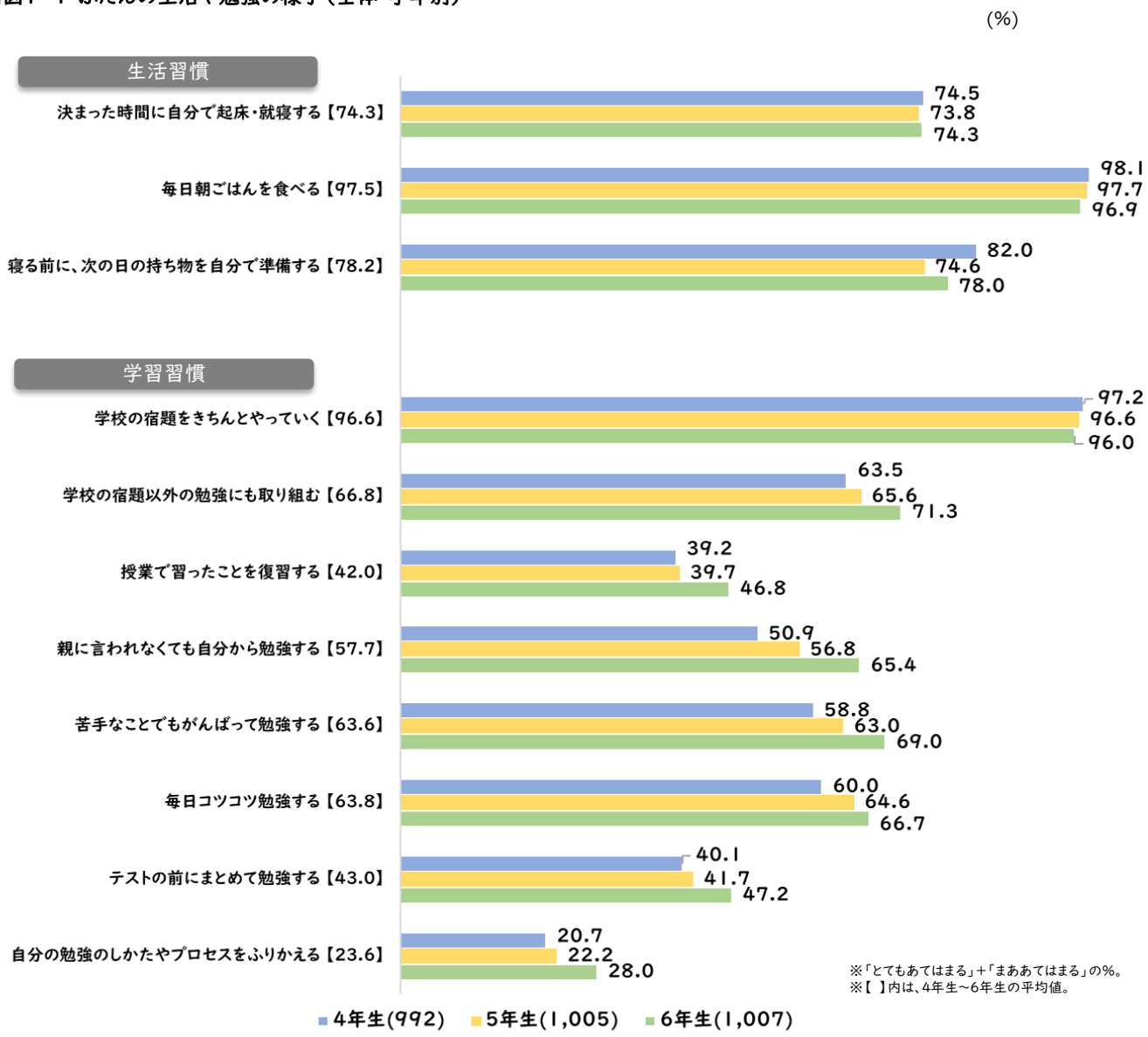
(1) 生活習慣や学習習慣

学年が上がるにつれ、学習習慣が身につく。

生活習慣に関する3項目と学習習慣に関する8項目について、ふだんの生活でどのくらいあてはまるかを尋ねた。学年別にみると「とてもあてはまる」+「まああてはまる」と回答した割合は、生活習慣ではほとんど変わらない。一方、学習習慣についての項目は、「学校の宿題をきちんとやっていく」を除いて増加する傾向にある。小学4年生から6年生にかけて、徐々に学習習慣が定着していく様子が見えてくる。

Q.ふだんの生活や勉強の様子について、次のことがどれくらいあてはまりますか。

■図1-1 ふだんの生活や勉強の様子(全体・学年別)



(2) 学習時間と読書時間

小学4～6年生の約4割は、読書をしない。

ふだんの日の学習や読書の時間について尋ね、それぞれの平均値を算出した。学年別にみると、「学校の宿題」「通信教育」「購入したドリル」にかかる時間も変化はみられない。一方で、「それ以外の勉強」「学習塾」の時間は学年が上がるにつれ増加している。読書時間は、学年が上がるにつれ少し増加がみられるが、どの学年においても約4割が「読書をしない」と回答している。

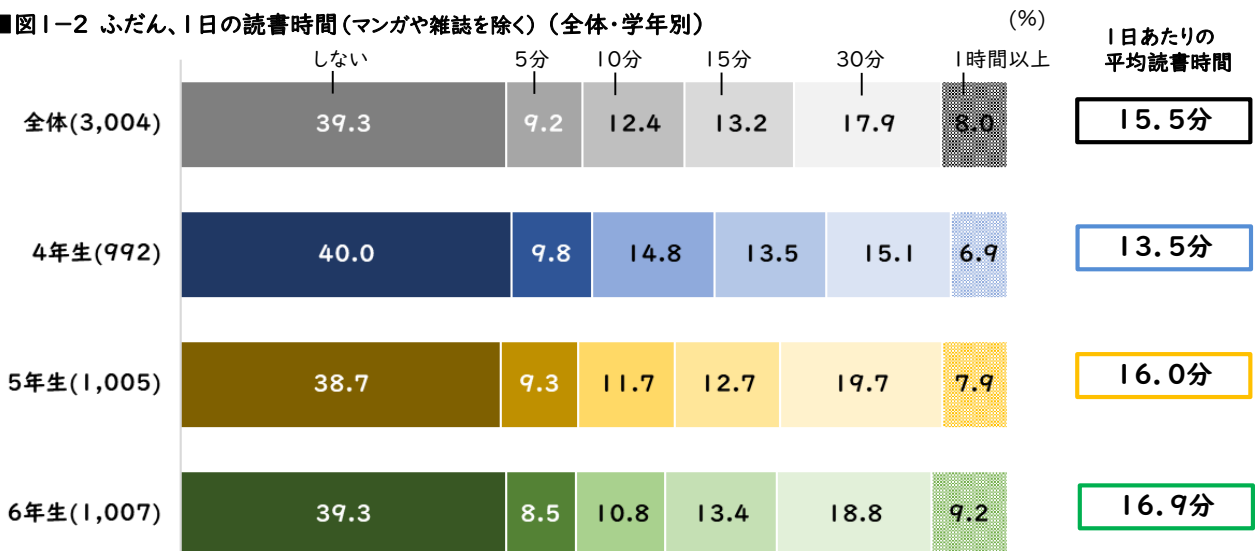
Q.あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。学校の中でやる時間は除いてください。日によって違うときは、平均してだいたい時間を教えてください。

■表1-1 ふだん、1日の平均学習時間(学年別)

	4年生 (992)	5年生 (1,005)	6年生 (1,007)
1.学校の宿題	34.6分	37.1分	36.4分
2.通信教育	8.3分	8.6分	8.7分
3.購入したドリル	5.5分	4.6分	5.4分
4.上記1～3以外の勉強	11.1分	11.9分	19.4分
5.学習塾での勉強時間	7.7分	14.7分	22.0分
平日1日の総学習時間	1時間7分	1時間17分	1時間32分

※平均時間は、「しない」を0分に置き換え、「5分」「10分」「15分」「30分」～「4時間」まで30分刻みの選択肢は分単位に統一してそのまま、「4時間より多い」を270分に置き換えて算出した。
 ※学習塾での勉強時間:平日、学習塾での1回勉強時間×1週間通っている回数÷5日。学習塾に通っていないと回答した場合は、学習塾での勉強時間を「0分」として算出した。

■図1-2 ふだん、1日の読書時間(マンガや雑誌を除く)(全体・学年別)



※「1時間」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」「4時間」「4時間より多い」を「1時間以上」にまとめた。
 ※平均時間は、「しない」を0分に置き換え、「5分」「10分」「15分」「30分」～「4時間」まで30分刻みの選択肢は分単位に統一してそのまま、「4時間より多い」を270分に置き換えて算出した。

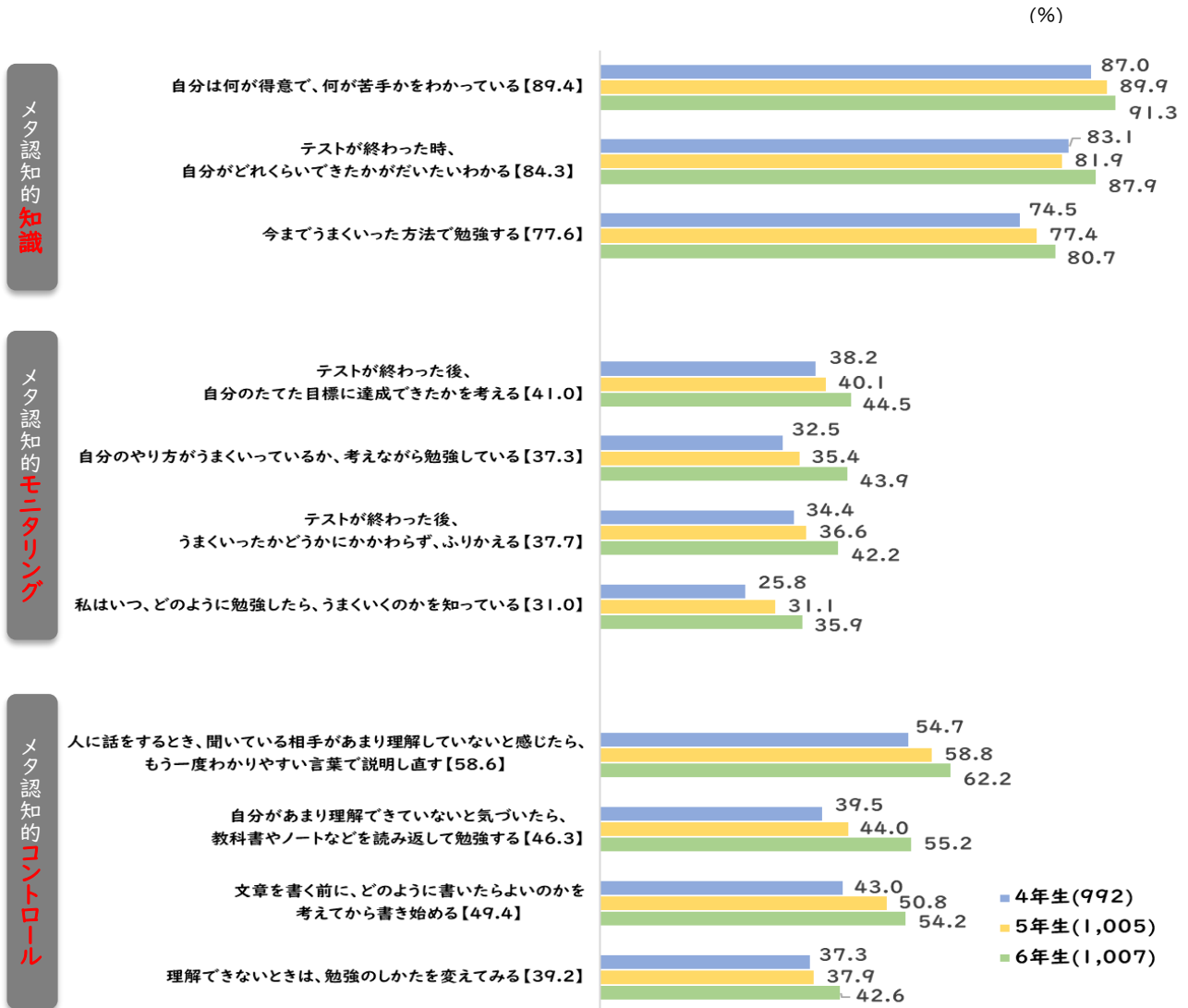
(3) メタ認知

学年が上がるにつれ、メタ認知が徐々に発達。

小学校高学年の子どもが自分の学習をどこまで客観的に捉えられるのかを確認した。「とてもあてはまる」+「まああてはまる」と回答した割合をみると、いずれの項目も学年が上がるにつれ増加する傾向にある。また全体的にみて、小学校高学年の実態として「メタ認知的知識」ほど、「メタ認知的モニタリング」「メタ認知的コントロール」はまだできていないことが分かる。

Q.勉強するときの行動や考えをふりかえて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

■図1-3 メタ認知の実態(全体・学年別)



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

※【 】内は、4年生~6年生の平均値。

※11項目で、「メタ認知」を測定するのはなく、小学校高学年の子ども「メタ認知」の実態を捉えることが目的である。子どもの発達状況などが影響している可能性が考えられる。このため、数値を読み取る際、注意が必要である。

※『成人用メタ認知尺度の作成の試み—Metacognitive Awareness Inventory を用いて—』(阿部真美子、井田政則 2010)を参考に、項目を作成。

(4) 勉強方法(学習方略)

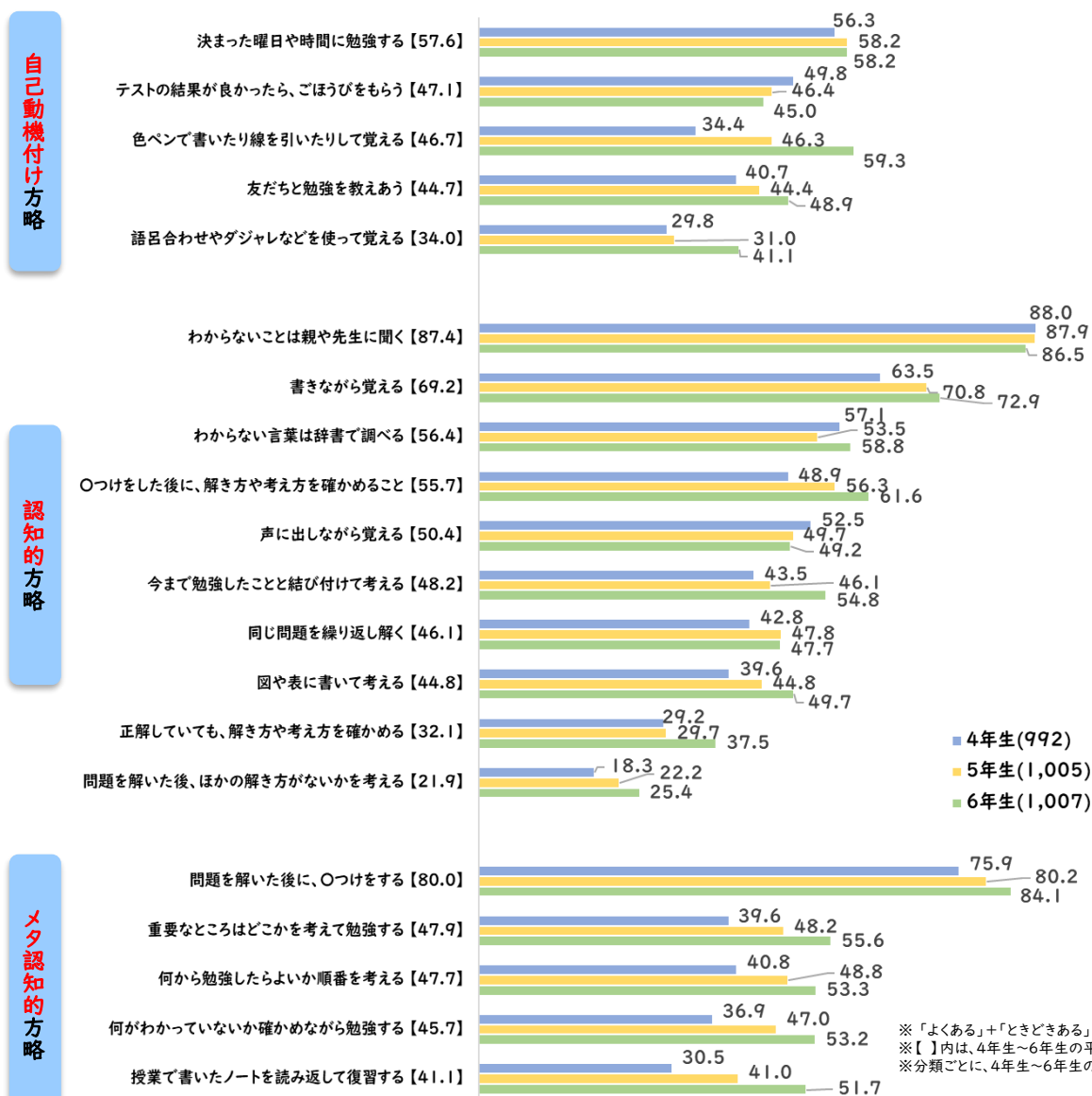
学年があがるにつれ、メタ認知的方略を獲得。

「よくある」+「ときどきある」と回答した割合を学年別にみると、多くの学習方略の活用率は増加している。とくに「色ペンで書いたり線を引いたりして覚える」や「授業で書いたノートを読み返して復習する」といった、自分で動機付けを高めたり、メタ認知を働かせたりして、効率化を図り、効果的に学習する方略は20ポイント以上増加した。認知的方略やメタ認知的方略は学年が上がるにつれ活用率が上昇していることが特徴である。

Q.あなたはふだん、勉強するときに、次のことがどれくらいありますか。

■図1-4 勉強方法(学習方略)(全体・学年別)

(%)



※「よくある」+「ときどきある」の%。
 ※【 】内は、4年生~6年生の平均値。
 ※分類ごとに、4年生~6年生の平均値の降順に表示。

(5) 学習の計画と振り返り

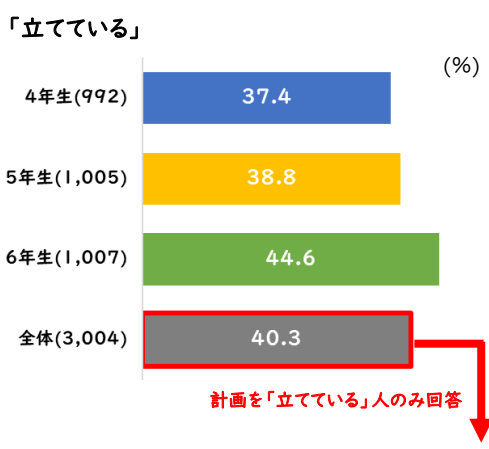
計画は約4割、振り返りは約8割が実施。

学習の計画や振り返りの状況について尋ねた結果をまとめる。学習の計画を「立てている」と回答した比率は40.3%、学年別にみると学年が上がるにつれ増加傾向である。また計画を立てるときは、約7割が今までの経験を踏まえ、実現可能かを考えている。学習の振り返りとして「間違えた問題は見直して解き直す」と回答した比率は76.3%、学年別にみると4年生から5年生にかけて増加している。

学習の計画を立てる

Q.あなたはふだん、勉強するとき、計画を立てていますか。

■図1-5 学習の計画(全体・学年別)



Q.勉強の計画を立てるとき、あなたは以下のことがどれくらいあてはまりますか。 全体 (%)

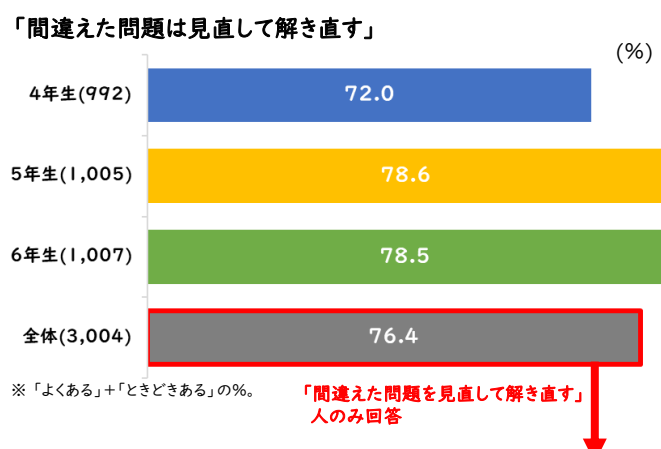
計画が実現できそうかを考えながら立てている	74.0
今までの経験を踏まえて、計画をたてている	68.5
今、勉強していることは、計画に沿っているかを考えながら取り組んでいる	64.9
計画どおりに勉強できたかをふりかえる	61.0
立てた計画がうまく進んでいなければ見直しを行う	56.6
「いつ、何時に、何を勉強するか」1週間単位で計画を立てて進める	50.9
計画通りに勉強を進めることができない	31.7

※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 ※降順に表示。
 ※計画を「立てている」と回答した1,254人は分析対象。

学習を振り返る

Q.あなたはふだん、勉強するとき、次のことがどれくらいありますか。

■図1-6 学習の振り返り(全体・学年別)



※「よくある」+「ときどきある」の%。

「間違えた問題を見直して解き直す」人のみ回答

Q.間違えた問題の見直し方について、あなたは以下のことがどれくらいあてはまりますか。 全体 (%)

間違えた問題をもう一回解く	89.7
親や先生となぜ間違えたのかを確認する	75.7
なぜ間違えたのかを自分で考える	68.9
理解できていない部分について、もう一度教科書を読み返す	67.8
自分に合った勉強方法を工夫しながら見直しを行う	42.7
なぜ間違えたのかを文章にまとめる	13.4

※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 ※降順に表示。
 ※「間違えた問題を見直して解き直す」の質問に対して、「よくある」「ときどきある」と回答した2,413人は分析対象。

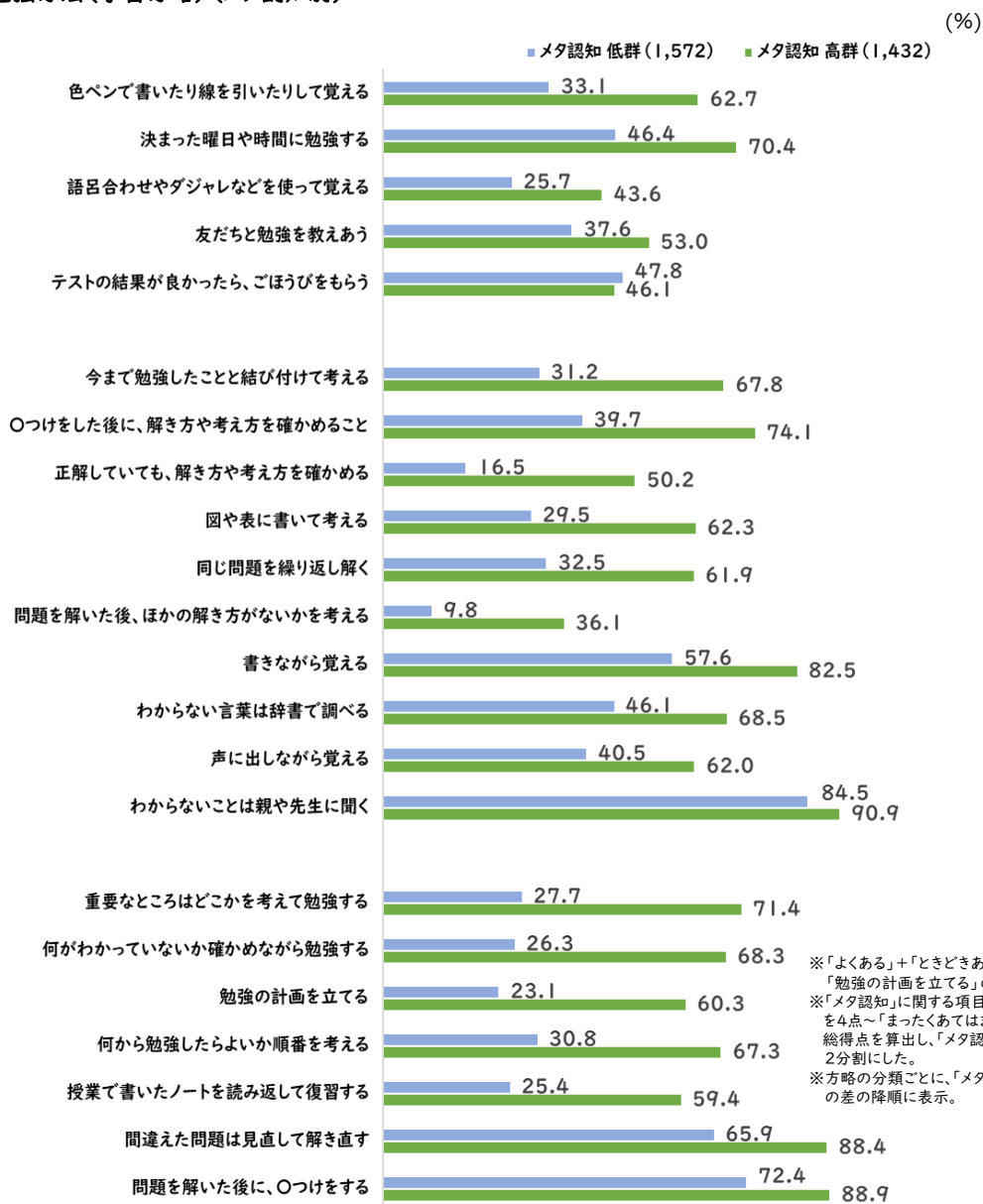
(6) 勉強方法とメタ認知

メタ認知が高いほど、学習方略を活用。

メタ認知を「低群」と「高群」に分け、学習の計画・振り返りを含めた学習方略に関する計22項目との関係を確認した。「テストの結果が良かったら、ごほうびをもらう」を除き、メタ認知「高群」のほうが「よくある」+「ときどきある」と回答した割合が高い。とくに「重要なところはどこかを考えて勉強する」「何がわかっていないか確かめながら勉強する」といった、メタ認知を働かせた方略で、メタ認知「低群」と「高群」の差が開いた。

Q.あなたはふだん、勉強するときに、次のことがどれくらいありますか。

■図1-7 勉強方法(学習方略)(メタ認知別)



※「よくある」+「ときどきある」の%。ただし、「勉強の計画を立てる」のみ「立っている」の%。
 ※「メタ認知」に関する項目について、「とてもあてはまる」を4点、「まったくあてはまらない」を1点とし、11項目の総得点を算出し、「メタ認知 低群」「メタ認知 高群」と2分割にした。
 ※方略の分類ごとに、「メタ認知 高群」「メタ認知 低群」の差の降順に表示。

自己動機付け方略

認知的方略

メタ認知的方略

(7) 勉強の工夫と効果

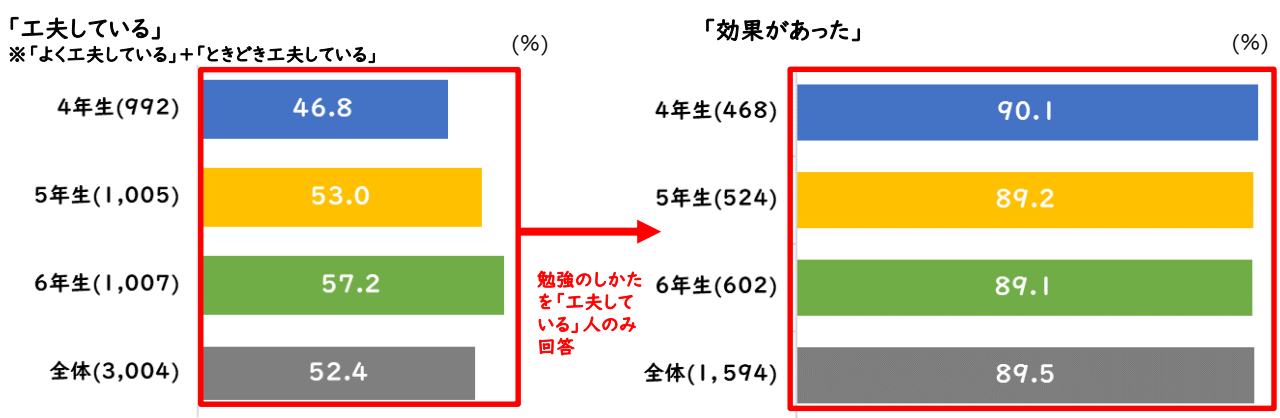
約半数が、勉強のしかたを工夫している。

ふだん、勉強のしかたを工夫するかを尋ねたところ、「よく工夫している」+「ときどき工夫している」と回答した比率は全体で52.4%、また学年が上がるにつれ増加している。また、工夫することで「効果があった」と回答した比率は全体で89.5%で、学年別にみても差はない。具体的な効果としては、「勉強の内容が分かるようになった」が全体で61.1%でもっとも高く、「やればできると自信がついた」(5割弱)がそれに次ぐ。

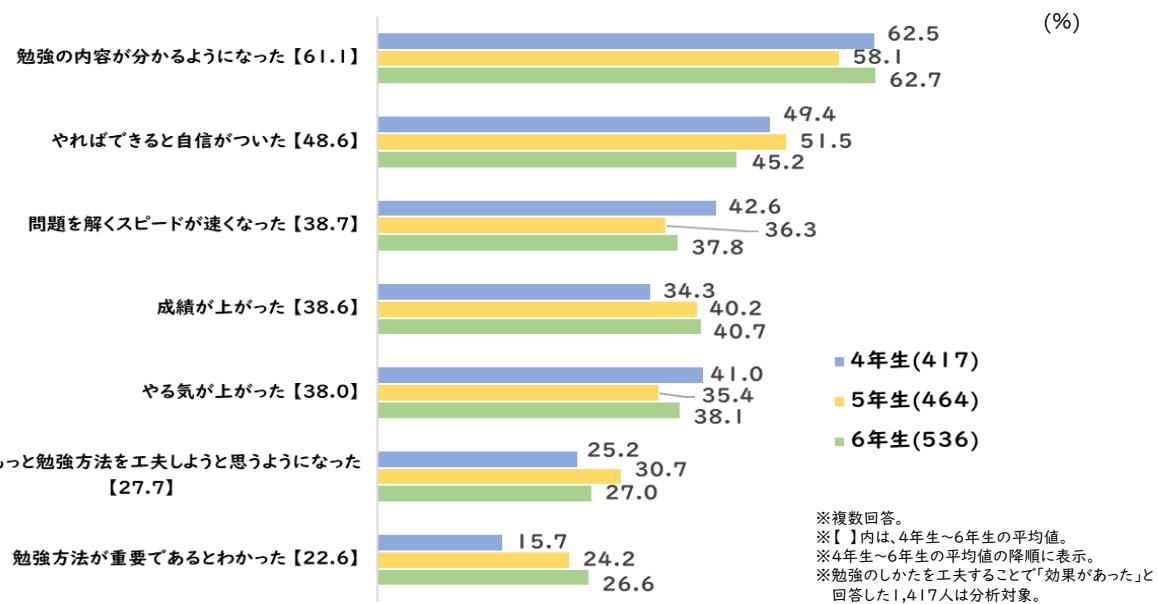
Q.あなたはふだん、勉強のしかたを工夫しますか。

Q.勉強のしかたを工夫することで、なにか効果がありましたか。

■図1-8 勉強の工夫と効果(全体・学年別)



Q.どのような効果がありましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。



※複数回答。
 ※【 】内は、4年生～6年生の平均値。
 ※4年生～6年生の平均値の降順に表示。
 ※勉強のしかたを工夫することで「効果があった」と回答した1,417人は分析対象。

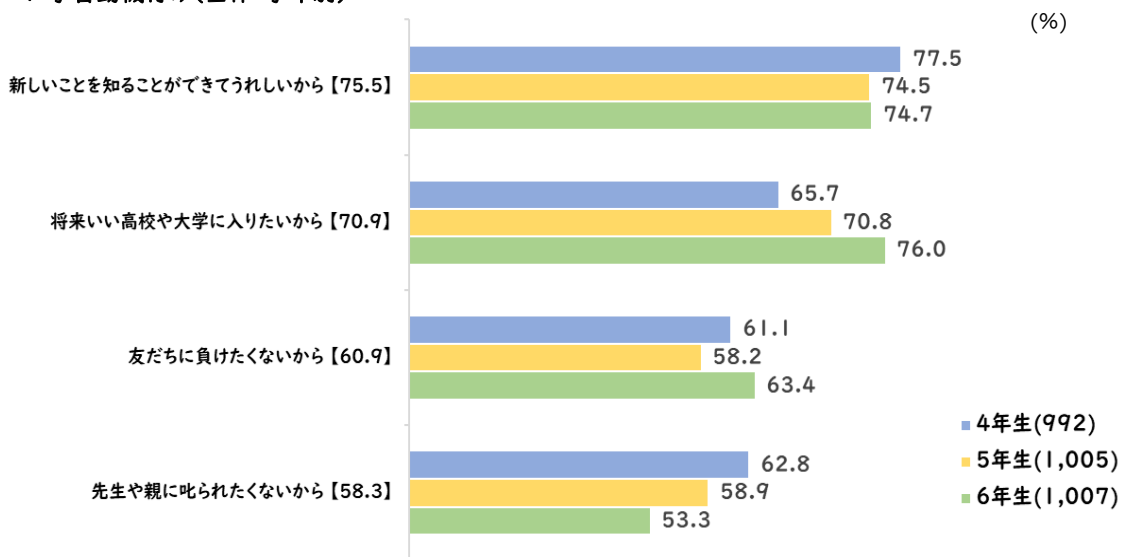
(8) 勉強する理由(学習動機付け)

将来の進学を動機に勉強する 小6生は76.0%。

学習の動機付けについて、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」と回答した比率をみると、「新しいことを知ることができてうれしいから」が全体で75.5%でもっとも高い。学年別にみると、学年が上がるにつれ「先生や親に叱られたくないから」が減少し、「将来いい高校や大学に入りたいから」が増加する。メタ認知別にみると、メタ認知「低群」のほうが「先生や親に叱られたくないから」といった外的動機付けで勉強する傾向である。

Q.あなたが勉強する理由について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

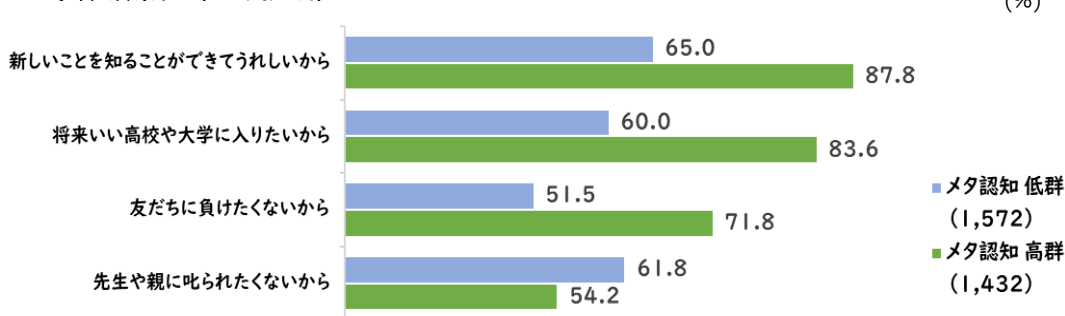
■ 図1-9 学習動機付け(全体・学年別)



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
※4年生～6年生の平均値の降順に表示。

Q.あなたが勉強する理由について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

■ 図1-10 学習動機付け(メタ認知別)



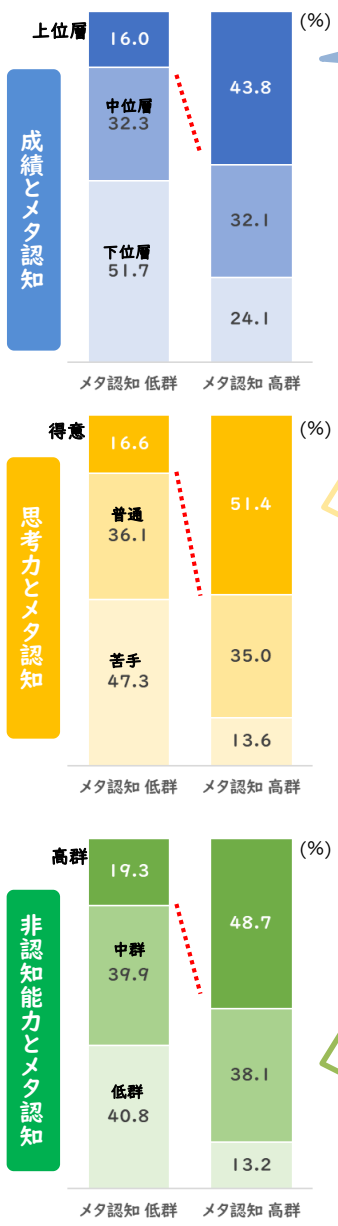
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
※「メタ認知」に関する項目について、「とてもあてはまる」を4点～「まったくあてはまらない」を1点とし、11項目の総得点を算出し、「メタ認知 低群」「メタ認知 高群」と2分割にした。

(9) 学習成果とメタ認知

メタ認知は、成績・思考力・非認知能力に影響。

本調査では、子どもの成績のみならず、思考力や非認知能力も学習成果と定義している。まず子どもの成績の自己評価とメタ認知との関係を見ると、メタ認知「高群」は「低群」に比べ、成績「上位層」が27.8ポイント（「高群」43.8%、「低群」16.0%）高い。同様に思考力「得意」は34.8ポイント（「高群」51.4%、「低群」16.6%）、非認知能力「高群」は29.4ポイント（「高群」48.7%、「低群」19.3%）高い。このことから、メタ認知が高いほど、成績・思考力・非認知能力も高いことが分かる。

■ 図1-11 成績・思考力・非認知能力の自己評価（メタ認知別）

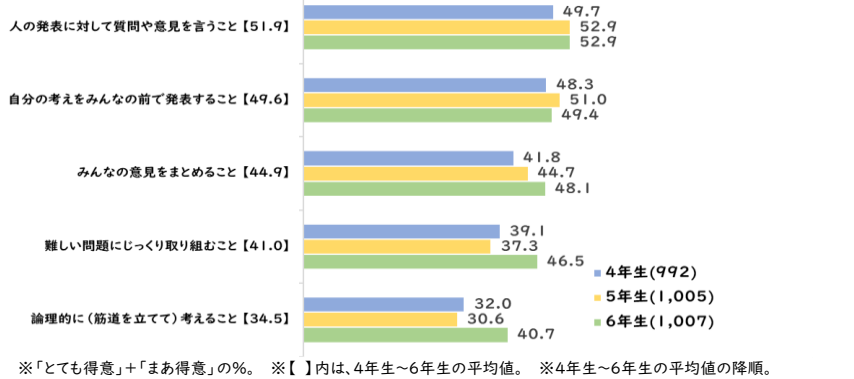


成績:「国語」「算数」「理科」「社会」「英語」の5教科について5段階で尋ねた自己評価(「上のほう」5点~「下のほう」1点)から総得点を算出し、「上位層」「中位層」「下位層」と3分割にした。

思考力:以下の5項目(「とても得意」4点~「とても苦手」1点)から総得点を算出し、「得意」「普通」「苦手」と3分割にした。

Q.あなたは、次のことがどれくらい得意ですか、苦手ですか。

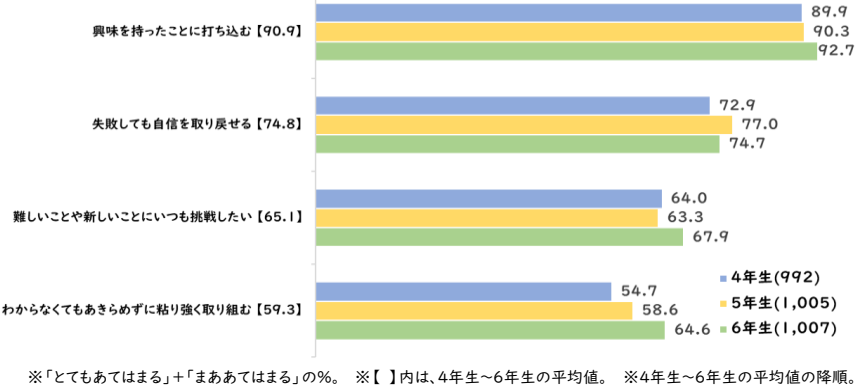
■ 図1-12 思考力の自己評価（学年別）



非認知能力:以下の5項目(「とてもあてはまる」4点~「まったくあてはまらない」1点)から総得点を算出し、「高群」「中群」「低群」と3分割にした。

Q.あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

■ 図1-13 非認知能力の自己評価（学年別）



※「メタ認知」に関する項目について、「とてもあてはまる」を4点~「まったくあてはまらない」を1点とし、11項目の総得点を算出し、「メタ認知 低群」「メタ認知 高群」と2分割にした。

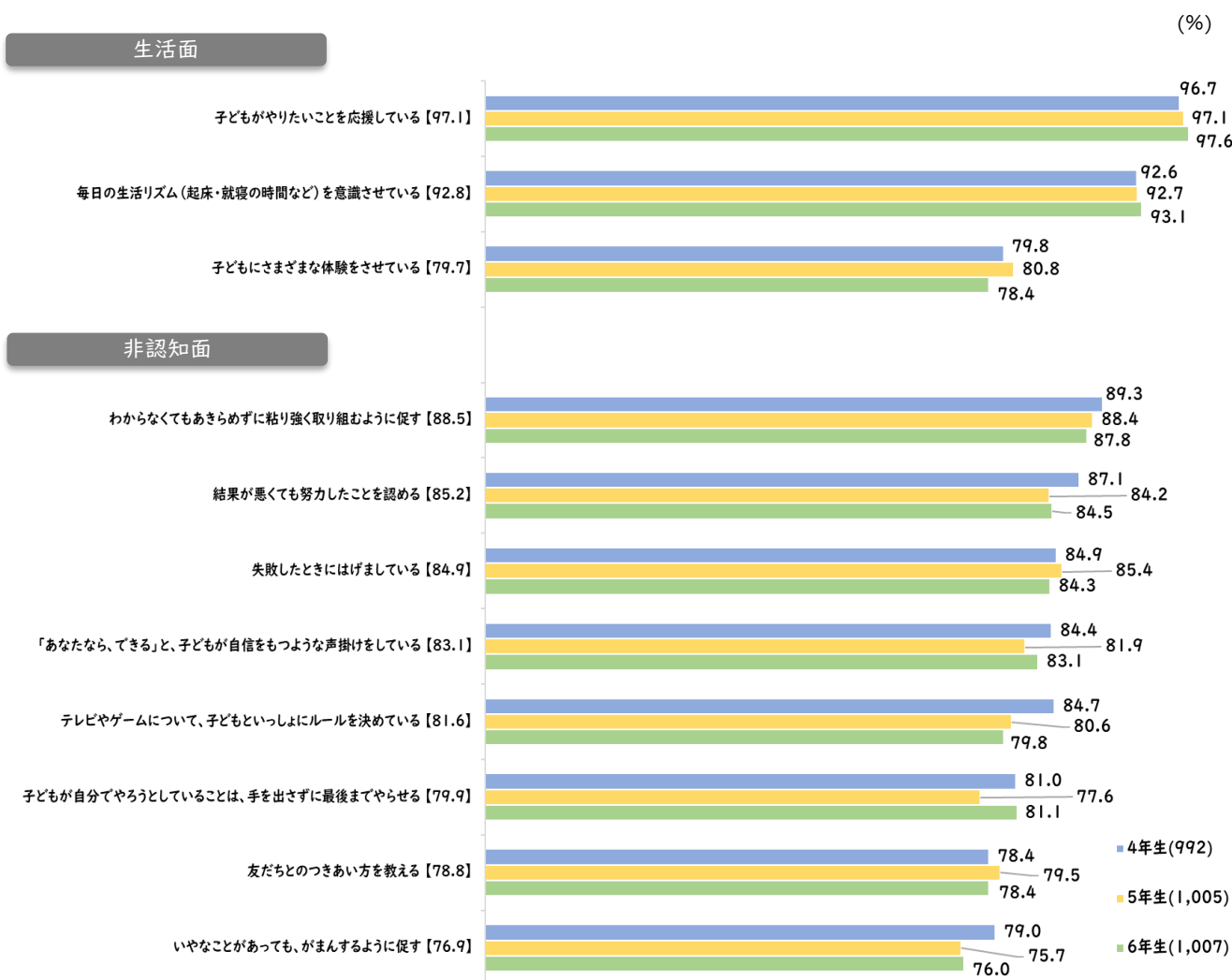
(1) 生活面や非認知面における関わり

生活面、非認知面ともに高い関わり。

保護者に子どもとの関わりを、生活面3項目と非認知面8項目で尋ねた。「とてもあてはまる」+「まああてはまる」と回答した割合をみると、いずれの項目も約8~9割と高い。「テレビやゲームについて、子どもといっしょにルールを決めている」以外は、学年別による変化はほとんどみられない。子どもの生活や非認知能力を重視する保護者の姿が浮き彫りになった。

Q.あなたは調査対象となっているお子さまの生活や勉強に対するかかわりについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

■ 図2-1 子どもの生活面や非認知面における保護者の関わり(全体・学年別)



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

※【 】内は、4年生~6年生の平均値。

※生活面、非認知面ごとに、4年生~6年生の平均値の降順に表示。

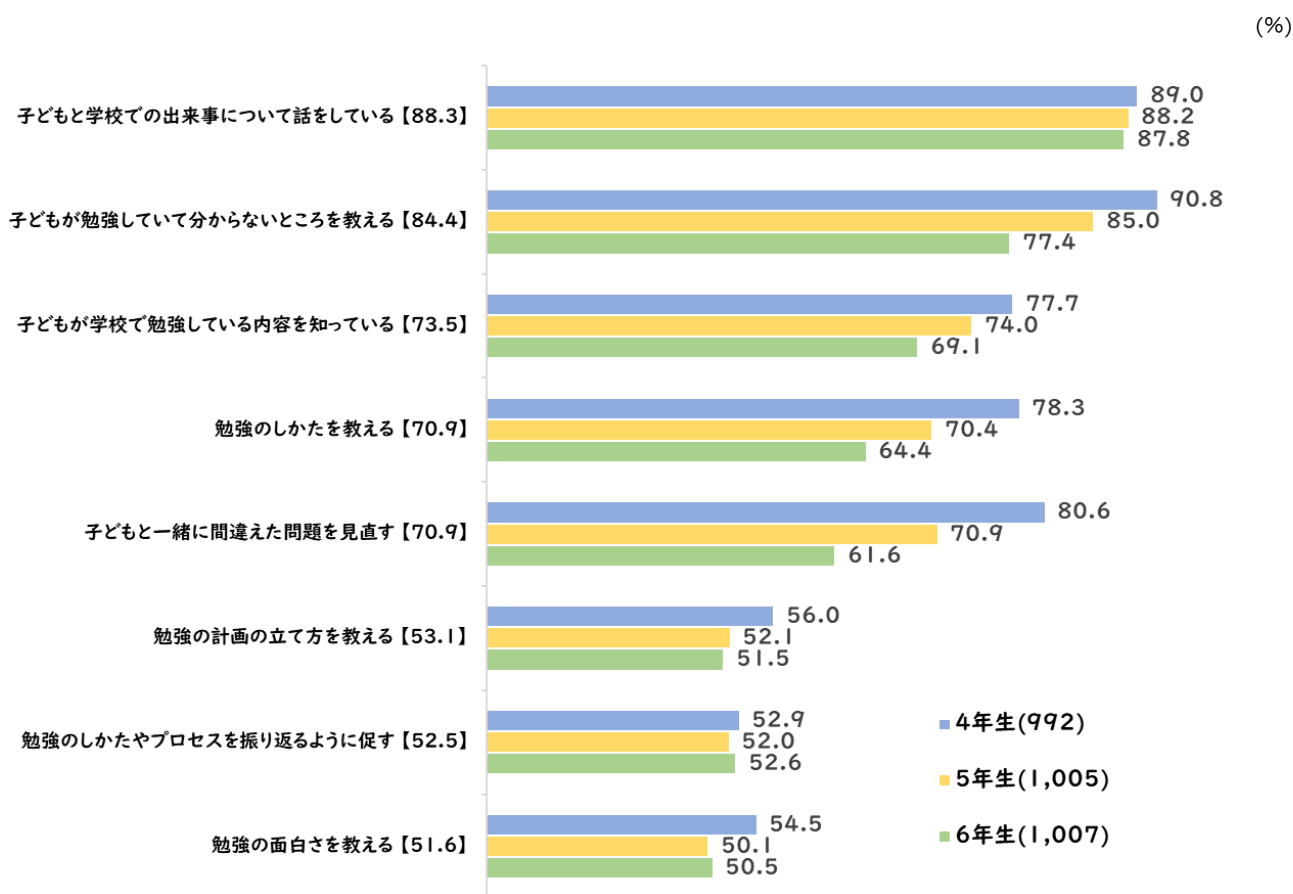
(2) 勉強面における関わり

5割の保護者は子どもの学習の計画だてや振り返りを促す関わりをしている。

保護者に勉強面での子どもとの関わりを、8項目で尋ねた。「とてもあてはまる」+「まああてはまる」と回答した割合をみると、「子どもと学校での出来事について話をしている」が約9割でもっとも高い。学年別にみると、「子どもと一緒に間違えた問題を見直す」「勉強のしかたを教える」「子どもが勉強していて分からないところを教える」といった勉強を教える行動が、学年が上がるにつれ減少する。

Q.あなたは調査対象となっているお子さまの生活や勉強に対するかかわりについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

■ 図2-2 子どもの勉強面における保護者の関わり(全体・学年別)



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

※【 】内は、4年生~6年生の平均値。

※4年生~6年生の平均値の降順。

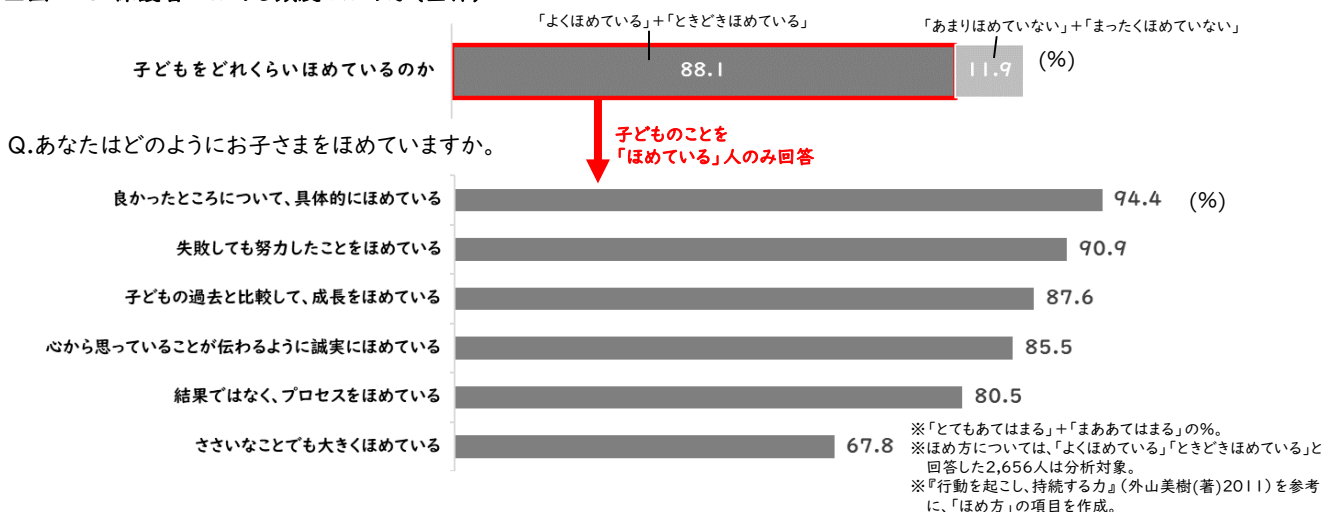
(3) 保護者のほめ方と効果

ほめることが子どものメタ認知や学習に影響。

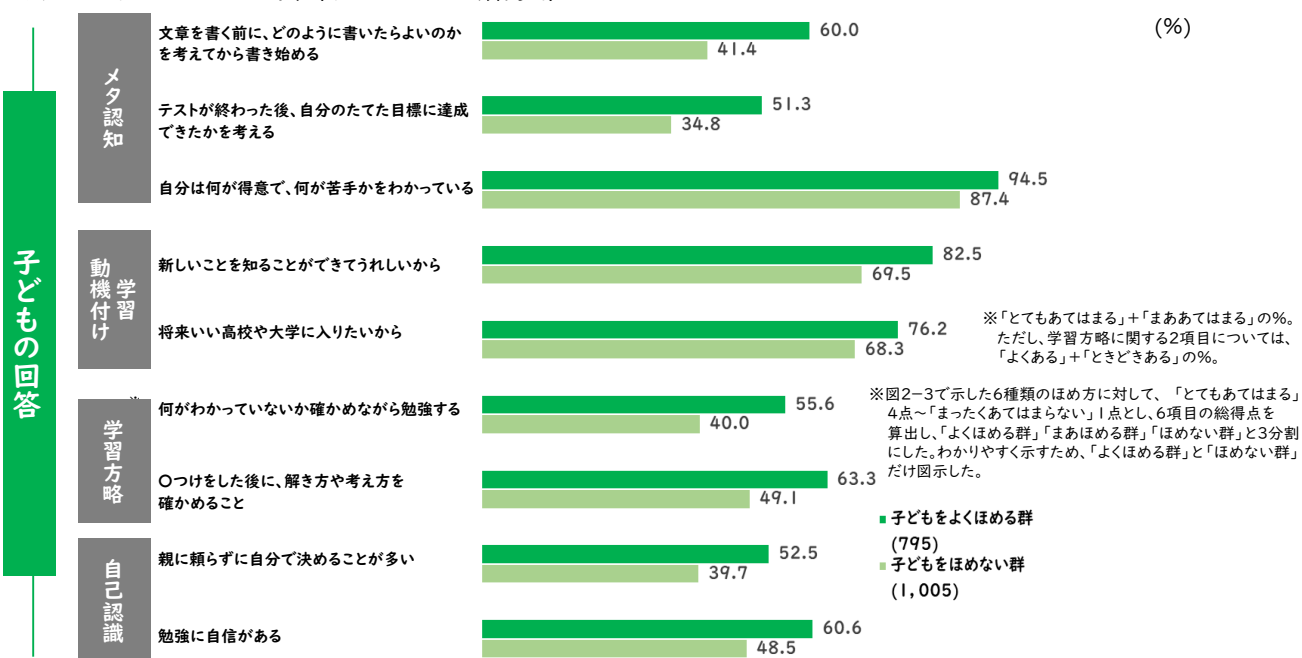
子どもを「よくほめている」+「ときどきほめている」と回答した比率は88.1%で、そのうちの9割以上が「具体的にほめる」「失敗しても努力をほめる」と回答している。さらに保護者がよくほめる群と、あまりほめない群で子どもの行動や意識を比較したところ、よくほめる群の方が、メタ認知が高く、学習方略の活用率も高く、自律的な動機付けて勉強する様子である。勉強に対する自信や自己決定に関する意識も高いことが明らかになった。もちろん子どもの自律的な学習態度や行動が保護者の関わりに影響し、さらに子どもの成長を促す好循環となることが考えられる。

Q.あなたはふだん、子どものことをどれくらいほめていますか。

■ 図2-3 保護者のほめる頻度とほめ方(全体)



■ 図2-4 子どもをほめる効果(子どもをほめる頻度別)



「小学校高学年の学びに関する調査2019」

調査企画・分析メンバー

高岡 純子 (ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室 主席研究員)

邵 勤風 (ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室 主任研究員)

※所属・肩書は、発刊時のものです。



ベネッセ教育総合研究所 WEB サイトのご案内

本ダイジェスト版およびベネッセ教育総合研究所で実施している各種調査結果は、以下のサイトでご覧いただけます。

<https://berd.benesse.jp/>

「小学校高学年の学びに関する調査2019」ダイジェスト版

発行日 2020年2月28日

発行人 谷山 和成

編集人 高岡 純子

発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

編集協力 松本 留奈